共同研究者の部屋

陸軍前橋飛行場の特攻隊を追い続けて

菊池　実

「特攻の真実の姿を後世に残す努力こそ、特攻戦死を犬死にたらしめないために残された者に負託された最小限の責務ではないだろうか。それは犠牲を賛美するためというより記憶するためである。」と森岡清美はその著『若き特攻隊員と太平洋戦争　その手記と群像』で述べられている。私もそんな思いで少しずつ証言を求め、記録し続けている。

※　※　※　※　※　※　※

本年 9 月 28 日、陸軍前橋飛行場で特攻訓練を行った隊員の親族の方と東京のホテルでお会いすることができた。「小林日誌」を残された誠第 37 飛行隊長の姪御さんと誠第 38 飛行隊生還隊員のお孫さんである。お孫さんとはすでに 3 年ほど前から交流がある。7 月にも隊員が搭乗していた 98 式直協偵察機の操縦席計器板を南九州市にある知覧特攻平和会館でともに調査した。その時の様子が讀賣新聞群馬版（2014 年 8 月 13 日付）に報じられたことがきっかけとなって、小林敏男少尉の姪御さんと初めてお会いすることができたのである。話は数時間に及び親族ならではの思いがつたわってきた。そしてこれまであまり公にされていなかった特攻隊にかかわる複数の写真を検討することができた。

そのひとつが誠隊出陣式の写真と思われるものである。これまで詳細は不明であった。

陸軍前橋飛行場で誠隊の出陣式が挙行されたのは、1945 年 3 月 20 日のことである。「小林日誌」や当時下志津教導飛行師団長であった片倉衷の手帖からもこのことは確認できる。

「小林日誌」には次の記述がある。「三月二十日　晴　晴れの門出出陣式なり。この日を迎へても而も出で立たむとする心境何等変わる所無し。特攻隊として突撃を敢行するは他人の如き感せらる。十四〇〇師団長来たり十六〇〇より神儀出陣式を行ふ、（後略）」

また、片倉衷の 3 月 20 日の手帖には「前橋出陣 16,00」、翌 21 日は「前橋特攻、伊香保白木屋」の記述が認められる。「小林日誌」に記された師団長とは、片倉衷のことである。

出陣式のことについては 1956 年に刊行された『堤ヶ岡村誌』に記されている。それによれば、注連縄を張り廻らした式場では、神官が厳かに祝詞を上げる。そして訓示があり、挨拶があった、という。写真はその時の情景を写したものであろうか。

では、あらためてこの写真を見てみよう。神主の前で整列している隊員は 6 名、このうち左 2 名は将校、4 名は下士官である。誠隊の各隊隊員は 12 名、内訳は将校 4 名、下士官 8 名の構成であった。誠第 36 飛行隊の下手豊司曹長が確認されていることから、36 隊の将校、下士官の半数が整列しているものと考えられる。そして後方には他の隊員と 98 式直協偵察機が写っている。写真右後方に写っている将校は、下志津教導飛行師団の関係者と思われる。写真は 3 月 20 日の飛行場における出陣式に間違いないものと思われる。

この出陣式のあと師団長訓示と会食が行われた。その時、ある出来事が突発した。「小林日誌」には「引き続き会食ありたるも、態度不可なりとの理由に依りて師団長中途にて座を立ち、冷たき空気漲りたり。」とある。この一件はかなり後々まで尾を引いたようである。翌日には「昨夜の不愉快なる気未だ去らず。師団長飛行場を去るに際し、訓示ありぬ。」、そして 23 日の日誌にもさらに 24 日にも記述は続く。

この 20 日の会食について、その体験を最近になって記している人がいる。当時、飛行場に軍属として勤務されていた方である。それによると「三月二十日ころ、今夜は第二十三振武隊（誠

飛行隊の誤り－筆者注）の出陣式があるというので食堂に皆集まりました。五、六十人の人がいたと思います。偉い人が挨拶をした後祝杯を挙げました。お酒もでてにぎやかな時間が過ぎていきましたが、喧嘩が起きてしまいました。ワーワー言っているのですが、だれとだれが喧嘩しているのか分かりませんでした。（後略）」。この体験記は「小林日誌」を裏付けるものとして重要であるが、残念ながら事の発端はわからない。しかし、師団長と特攻隊員との間に抜き差しならぬ出来事があったことだけはわかる。実はこの一件が3月31日の熊本県隈庄飛行場で隊員2名の事故死に関係していたようなのである。

さて、南九州市にある知覧特攻平和会館で操縦席計器板の調査を行ったのは7月、その収集された経緯は次の通りである。

2000 年、沖縄県北部古宇利島沖の海底に、1945 年 4 月 6 日の特攻機の突入によって大破、海没処分された米軍掃海駆逐艦「エモンズ」が沈んでいることがわかった。当時、レーダーピケット任務に従事していた「エモンズ」は 5 機の特攻機によってほぼ同時に攻撃を受けた。1 機が三番砲塔の喫水線付近に突入し、弾薬庫に引火、大爆発を起こし、翌 7 日、海没処分とされたのであった。

さらに 2010 年、この「エモンズ」の近くで見つかった航空機のエンジンが、陸軍の 98 式直協偵察機のものであることが明らかにされた。その機が 1945 年 4 月 6 日、宮崎県新田原飛行場から出撃した誠第 36・37・38 飛行隊未帰還 26 機のうちの 1 機である可能性が高いことがわかったのである。4 月 6 日の陸軍特攻機 82 機の中でこの 98 式直協偵察機を使用したのは、この 3 隊に限られていたからであ。今回調査したのはその機体の操縦席計器板であった。

計器板は長い間海底に沈んでいたためにかなり腐食している。さらに引き上げられてから時間もたっていたことで劣化も進んでいた。大きさは現状で縦・横ともに 36.4cm、厚さ 3～4mm を計り、重量は 2.49kg である。表面に 10 箇所の円形や楕円形の穴、または窪みが開いていて、ここに計器がはめこまれていたものであろう。

突入された米軍艦船と突入した特攻隊員、双方の名前が判明しているのは特攻作戦全体を見ても希有な事である。そんな中で 4 月 6 日の特攻では、誠第 36 飛行隊の岡部三郎伍長の最後の状況が判明している。それは水陸両用戦時輸送船である「キャスウェル」の舷側に突入したことである。

ではこの操縦席計器板の付いた飛行機を操縦していた隊員は誰であったのだろうか。陸軍前橋飛行場で特攻訓練を行った 36 名の隊員の消息は次のようであった。

3 月 31 日の熊本県隈庄飛行場での 2 名事故死、4 月 6 日当日、熊本県健軍飛行場で 1 名が墜落死。同日午後、宮崎県の新田原飛行場を飛び立ったのは 28 機であった。5 名が機体の故障等で飛び立っていない。そして沖永良部島から沖縄島にかけて 26 名が特攻死した。2 名は沖永良部島と喜界島に不時着している。突入時の状況が判明しているのは先に紹介した岡部三郎伍長機である。これらのことから「エモンズ」に突入したのは、残り 25 名の中の一人となる。しかし現状では誰であったのかを特定することは不可能である。

現在、水中考古学研究の対象となっている「エモンズ」、その調査の過程で個人を特定できる遺留品が発見されることを期待するしかない。

菊池実さんは現在は群馬県埋蔵文化財調査事業団上席専門員。今年、明治大学から博士号（史学）を授与されました。次回はご本人のライフヒストリーの予定です。お楽しみに。